

# あごら

**MINI** <60号>  
1982年4月10日発行 ¥100 千40

- 何でも言える●何でも書けるミニ雑誌<あごらミニ>
- 小さな<ひろば>=AGORA・<あごら>
- あなたの声を待ってます。みんなでつくる<あごら>

よく晴れた暖かい朝、核兵器禁止の署名用紙を持って近所の家をまわる。今まで、雇用平等法や教科書問題など、さまざまな署名を集めてきたが、こんなに皆に気持ちよく署名に応じてもらえたのは初めてです。文学者などの核兵器禁止・軍縮へのアピールを、マスコミが大きく取り上げているのでいちいち説明をする必要もありません。三千万人国民署名運動は広く浸透しつつあるように思えます。

2月22日には、愛知にも「核兵器禁止国民署名愛知県センター」が発足し、3・21のヒロシマデーに向けてバスツアーを組むなど、動き始めています。

昨年11月29日、16の婦人団体が集まって「あいち婦人の平和集会」をもち、「ヨーロッパ各地で高まっている核兵器配備に反対する市民デモに対し、後退するかのような日本の状況を黙して座視することはできない」というアピールを採択しました。それから半年足らず、現在の反核署名の広がりは、私たちの願いの現実化のようで心が踊ります。しかし踊る心のどこかにふつと疑問がわいてきます。

十二人の署名を一人で集めてくれた友人は

## 核兵器をつくるのは私たち

伊藤 汎 美

「核兵器は怖いわね、反対よ。でも最低の自衛権として今程度の自衛隊は必要だと思うわ」と言います。そして、地方選挙になると、卵のケースを抱えて保守系議員の票まとめに走りまわる。だれもが核兵器反対の声のもとにはうなずき、共感します。政府は非核三原則を守っていると言うし、日米安保を容認している政党も、核兵器反対の署名を始めています。まるで、核が、核だけ単独でどこかに存在するかのような錯覚さえ抱いてしまっています。

しかし核はそれを生みだすさまざまな状況や要素の重なりから作られてくるものでしょう。私たちが、ガスを使い、水を使い、電気を使い、子供を育て、学校へやる。こうした日常がどこへつながってゆくのか、そこをしっかりと見つめ考えることが、今こそ必要ではないでしょうか。

核兵器を作りだしているのは、私なのかもしれません。日々の生活と身近な政治とを見えないと、空中に浮かんた核という文字に足もとをすくわれそうな気がします。

こんな思いで道を歩いていると、一枚の署名用紙がずっしりと手に重い。

### 今月のなかみ

<編集担当・あごら東海>

表紙のことは	核兵器をつくるのは私たち	伊藤汎美	1
あれから五年、今、私たちは	大西和子・浅野美知子・岡部栄美香		2
山下智恵子・高橋ますみ・奥村和子			
全国婦人教育交流集会に参加して	関和子		5
反戦へ――草の根の動きひろがる			6
拠点通信から	札幌／武蔵野／東海／京都／九州		6
お知らせ	関西女性グループで「あごら京都」が発表		7
婦人週間テーマは「あらゆる分野への男女の共同参加」			
女のつどい・女の講座			8

## 共に考え 共に学ぼう

老いについて  
考えませんか

4月21日(水)午後2時から第一回の集まりをもち、今後の方向を考えましょう。おいでをお待ちしています。

斎藤千代・高橋倭子  
中村智子・福井浅子

## 外国のフェミニストと 英語を学びませんか

◆月曜クラス  
毎週月曜夜6時15分～7時30分  
月謝 3千円(非会員は6千円)

◆水曜クラス  
毎週第1第3水曜

◆月謝 2千円(非会員は4千円)  
会場は「あごら読書室」(地下鉄丸の内線「新宿御苑前」下車

1分、03 354 9014)  
◆月曜クラスは高卒程度の力で十分。水曜は、少し慣れた方向きです。

◆いつからでも参加できます。

あごら東海

# あれから5年 いま私たちは

1977年2月号の『あごらミニ』に私たち〈あごら東海〉は「夫について本音を語る」という座談会を載せました。しいたげられた妻たちのつぶやきに、「〈東海〉の人たちはなんて意識が低いんでしょ」と各拠点の会員のひんしゅくをかいました。

あれから5年、相変わらず〈あごら東海〉は主婦の本音を語る場です。しかし5年前に本年を語った人たちは、それぞれに自分の道を開いていっています。

## 女が変われば・・・

大西 和子

この五年間に変わったことは、私が再就職して、夫の扶養家族ではなくなったことである。これは夫との関係に大きな変化をもたらした。

五年前の座談会のころの自分を振り返ってみると、あんな健気な時代もあったのだ、と感慨深い。

あのころは、夫との闊いの日々、いやそれ以前だったろう。「女は黙って家に居ろ」と言う夫をひたすら恐れながら、ハあごらVや勉強会に出かけていた。東京でのハあごらV大会に行くのに、同窓会に、と嘘をついて出たあのころ。ハあごらVをやめる。やめなければ離婚だと脅かされれば、どうしようと、今ではおかしいような話だが、真剣に悩んだのである。

高橋ますみさんは「なんとかもっと強くないか？」と何度も静かに言ってくれた。一人で生きる自信を持ってということだった。しかし、その頃の私は、良妻賢母はイヤ、私の生き方を、と思っただけで、そのために夫とけんかをして家庭を壊したくはなかったし、経済的にも精神的にも一人で生きる自信はなかった。

しかし、その後のあごら仲間との交流の中で、私の人生を生きたい、との思いは徐々に強まっていった。私は夫に対し摩擦を避け、という今までの態度を変えて、自分を主

張するようになった。私の思いをぶつけるようになった。それに対して時にはコップを投げつけられたり、目から火花が出るほど殴られたりもした。その頃、ハあいちの会Vの講演会で小沢遼子さんの「食えない女なんて、男はこわくないのよ。」との言葉にハッとした。これだ、と思った。

経済的自立。それは私には遠いところにあった。十年も家にいた中年女に職があるかという点と、わからずやの夫のこと、そして自分自身がそれを真に望むまでに至っていない点である。しかしこのころから私はそれを強く望むようになった。自分の足で立つてこそ自分の人生では、との思いは確固となった。夫にわかってほしいし、もしわかってくれなくて離婚と言われればその時は受けて立とうとの気持ちになっていた。つまり、強くなったのだ。

末の子の小学校入学と同時に、新聞広告で見つけて専修学校の講師の職を得た。ずっと細々と続けていた英語の勉強が役立った。三年前、四十歳の再出発だった。

就職に際して、心配した夫の反対はなかった。それまでの闊いの中で、私の思いをわかってくれたのか。諦めたのか。

今では私が仕事や会合で家を空ける時には、子ども世話をしてくれる。私の仕事に役立ちそうな記事の載った新聞を持ち帰ってくれる。休日の夕食はたいてい献立から買物、調理までやってくれる。もともと、これは趣味だそうだが。子どもたちに「今日はお父さんの手打ちうどんが食べたい」などと言われると、嬉しくてたまらず、子どもを助手にしようどんをこねるのである。おかげで父子関係も大変よくなった。

経済的自立だけが自立ではないとの意見もあるし、私自身、職とは言っても一年ごとの契約更新という不安定な身分なので大きいこととは言えないが、それでも妻の経済力が夫に与える力はかなりあるというのが実感だ。夫たちだって、この厳しい世の中で、一家の経済を一人で背負っているよりは少しでも妻が共に背負ってくれば気楽になるのである。妻の給料日に小遣いでも貰えば、気分の悪いはずはない。気楽になれば人の気持ちを思いやるゆとりもできるのである。

会社人間の夫たちも、最初はしぶしぶではあったが、家事や育児に参加すれば、それが意外に楽しいことであり、子どもにも尊敬されて悪くないぞ、となり、人生、会社だけではないわい、となるのではなからうか。

五年前の窠居寸前状態に比べれば、現在の解放感は何ものにも代え難い。多くの先輩たちに教えてもらったように、女が変われば男も変わる、ということを実感している。そして徐々に社会が変わることを願っている。

## オットドッコイ

### 五年目のホンネ

浅野 美和子

日付を見ると七七年三月だから、あれからちょうど五年目というわけか。夫についての「ホンネを語る」を読み返してみると、なんと皆、被害者意識に促われていたのか、といとおしく不思議な気持ちになる。———ということは、当時の自分たちを横から眺められるほどには成長した、ということであろう。

風の便りに聞けば、夫との関係に悩み、あの座談会を提案した彼女は、今ではフェミニストセラピーで人の悩みを聴き助言する立場となり、また夫に殴られて耐えていた彼女は、ビジネススクールの教授となつて活躍中とか。また別の彼女たちは、あるいは作家に喫茶店主に、フリーライターに、地域の子供図書館の主宰者に、あるいは本を書き等々、それぞれみずからの歩く道をみつめて、達者に人生を歩き続けているようなのだ。その後夫との関係を語り合う機会もあまりないが、少くともあの当時のような駄音の声は、どこから聞こえて来ないのである。

さて、私自身はといえば、あの後学校を修了し、自分の研究テーマをみつけるとともに、専門的な仕事を得、それまでの算数教室と合わせて二つの仕事をかけ持つことになり、あごろVその他の会合にも、御無沙汰がちなっている。仕事に制約されない時間には、好きな時に出かけ、帰りたいなれば帰る。玄関でうつつむいて靴を磨いている夫を見送るが、靴に手は出さない。布団を畳まない」という苦情には、「自分でやれば」の一言で、翌日から夫は自分の分は畳むという具合。衣類の管理、部屋の掃除等、生活の自立もできて、どうやら粗大ゴミ予備庫からは免れているようだ。まだ家族の食事は作ったことはないが、退職後はそれもやってみるといふ約束がとりつけてある。

どうしてこうなったか。最近あまり議論したこともない。大したポリシーも持たず、言揚げするのが嫌いな夫は、技術的な即物性から、女房がしなければ俺がするほかないと観念しているようである。それに、新聞の論調に女性の自立論がリードし、マーケット

夫婦揃つての買物が常識化するという風潮にも影響されているだろう。そして、何より私が家計をある程度分担しているという事実に基づいているに違いない。

いま、夫についてのホッネは満足かといえ、オットドッコイ、これがなかなかの難物なのだ。どうにも隙間風が吹く思いがするの、彼が私の心の世界に関心を示さないことである。文学や思想のことで、私が話しかけても、ヌカにクギ、私の読むもの・書くものは「わからぬ」と無視。政治や社会についての考え方の微妙なズレもいつまでも埋まらぬ。

こんなふうだから、一緒に旅行やドライブをしても、じきに話題がなくなる。彼はそのことにいつこう痛痒を感じないようだが、私はたまらない。そこで外へ出かけて、男女の友人と語らい、心を満たす仕儀となる。

「ないものねだりはだめよ」とある友はいう。そうなんだ。初めに会ったとき、「天皇制反対」の看板に目が眩んだ私がいけないのだ。それに私が、機械設計という彼の仕事の世界に無知なのも、あいこだと言え。会社人間としていびつな成長をしてみた彼もまた、現代の犠牲者である。

こんなわけで不満はあるが、共に暮した二十余年の歳月の重みをはねのけるほどの切実は、今はない。今私たち二人を結びつけているものは、戦いの傷痕——成人病を持つお互いの身体へのいたわりと歳月を重ねた親しみであるうか。

男女がそれぞれの仕方、仕事・社会・家庭に関わりつつ、寄り添って生きるという状態に、私たちが少しでも近づき得るとしたら、それは今後の熟年期においては、ない。そ

## 夫についてのホッネを語る

五年後

岡部 栄美香

のために、退職後の夫には、市民運動への参加を勧めようと今から考えている。

私は昨年の三月から、思うところがあつて「のびのび文庫」という私設ミニ児童館を毎日開いているボランティアである。開いたころ、友達の出版記念会があり、そのパーティで少しお酒のまわった男たちと雑談していた。「児童館を作ったそうだねえ。偉いもんだ。よくやるねえ」とはめてくれて、だんだん話している。

「旦那が偉い。感謝しなくちゃ……。ぼくの女房だったら……叩き出してしまおう……」と最後に言った。思わず男のホッネがでたと思つた。

文庫を作るのに、すんなりできたのではない。息子の作文をかりれば、「昨年の冬まで、母は応接室で、細々と文庫をやっていたのですが、ユネスコから百冊もらえたので、急に大きくなりました。母が中古のプレハブ住宅を買ったので、父は怒つて、

「お前はお金がどんなに大切かわからんのか。自分で働いてもせんで」

「私が今までに無駄使したかしら。毛皮のコートを買ったか、ハワイへ旅行をしたと思えばいいじゃん。死ねば金は置いて行くのよ」「お前はいいでバカだ。美恵子が、すぐ嫁に行くようになるじゃあないか」

「でも、今までつましくやってきただもん、花畑をちょっとつぶしただけじゃないの」「先のことを考えないようなものは離婚だ。出ていけ」

「そいじゃあ、お父さん出ていってよ。私は子どもと、この家に残るわ……」

姉はぼくの横で、涙をこぼしてしゃくりあげていました。しかし、結局、父がもう増設しないという約束を母から取り、ミニ図書館開設となつたのです」というところだ。

私は二人目の育児のため、三十三歳の時に仕事をやめた。夫はとたんに亭主閑白になり、「並の女になれ」と良妻賢母をおしつけてきた。時々「食わしてやっている」と男の切り札を出した。距離が開いていくばかりの夫とこんな気持ちで生活するのなら、何を捨ててもいい、本当に別れようと覚悟をして真剣に喧嘩をした。その後の、ある時から夫は私を少しずつ抑圧しなくなってきた。

今、文庫は毎日ボランティアが入って、子どもも二十人くらいきている。ここを拠点にこの地域に文庫が増え、よみかさが広がり、女の講座ができてきた。私はまた市と話しあつたりこれらのことで忙しくなってきた。

冬は閉館のチャイムが鳴ると、もう外は暗くなっている。みぞれが降りそうな中をボランティアのTさんが帰っていった。バス停で立っていると、ある時自動車が歩道に寄つてきたそう。ドアが開いて、母家でチャラッとしたことのある私の夫が「乗って」といい、そして、黙って運転して家まで送ってくれたそう。それから、夫は閉館の時家にいれば、ボランティアをそれぞれの家まで送ってくれるようになった。まだ文庫の中へは、一度も靴をぬいで上がり、本を眺めてくれたことは

ないけれども、夫も少しずつ、確実に変わってきている。

本当はボランティアでなく、私がもう一度仕事をもち経済的自立をして、夫に変えざるをえない現実を作っていたかなければ、夫との関係が真によくならないと思えないが、この児童館が、次の世代の子どもや、お母さんの考え、話し合い、ふれあう広場になるのなら、私はこれでいいと思っている。やはり私は中途半端な生き方ではない。

## 夫の朝食づくり

山下 智恵子

台所から味噌汁のにおいが漂ってくる。目がさめてはいるが、疲労感が残っていて、すぐには起きあがれない。床の中から叫ぶことになる。

「みんなあ、起きなさいよお」

こどもたちに大声をあげてから、自分も行動開始。高校生、中学生、小学生が、それぞれ階段をかけおりたり、トイレにとびこんだり騒々しい。

台所へ入ると、夫が「今朝は、貝の味噌汁だよ」という。塩鮭もいい色に焼きあがっている。ちゃんと太根おろしが添えてある。

たいていの日の朝食が、私の手を必要とせず、こんなふうに整えられるようになったのは、いつ頃からだろう。夫に、朝食を作ってください、と言葉にして頼んだりしたおぼえはない。たぶんこれは、私の書いた外へ出ていったりの雑多な仕事量がすこしずつ増え

て、どうしても朝、からだがいふことをきかず、起きられない日が重つてからのことだろう。ここ二年くらい前からということになる。

朝食ぬきで出勤することのひもじさと、妻に対する腹立しさを、夫は自分で朝食を作ることで解決したのだ。必要にせまられ、台所に立ってだしをとり、味噌汁を作り、あれこれ材料を選んで副食を整えてみると、それはしだいに夫にとって楽しい作業に変わっていったのではなからうか。もともと食べることに作ることの好きな夫である。目玉焼にしたり、干物にしたり、色どりよく工夫して食卓に並べる楽しさ。家族のために役立っているという充実感。会社では味わうことのできぬ新しい喜びを、夫は発見したのだと思いたい。たとえ、最初のうちは「ものを書く女などを妻にしたのは一生の不作」と胸中でボヤいたとしても。

五年前の座談会で、私は夫の、ホンネとタマエの落差をしきりに嘆いている。五年を経た今、すっかりその嘆きが、解消したとはいえないが、以前よりは、ずつと呼吸しやすくなり、行動もしやすくなっている。

休日の前には、互いの予定をつきあわせて、こどもの世話や家事のわりふりを二人で調整することが多くなった。私の予定を、夫が自分の手帳に書き入れて、//じゃあこの日の夕食は作るから//といったりすることもある。

こうした夫の変化は、やはり私自身が報酬のある仕事、社会的な契約である仕事をするようになったことが、原因であると思う。その仕事の結果が、活字になったりテレビに映ったりすれば、一層、夫の認識が変わってくるといえる。妻、母としての私のほかに、仕事をする私のイメージが、夫の中に定着してき

たといってもいい。夫だけでなく、こどもたちも自分たちの母親の中に、一人の女としての生活があることに気づきつつあるように思える。

C新聞が、家庭欄に「男女平等、わが家では」という連載をのせた。その欄の取材をされたことがある。夫ははりきって、近所のスーパーで夕食のおかずを買っているところを、写真にとらせた。取材に訪れた女性記者とカメラマンに、手製のポテトサラダをすすめたりした。食事づくりのベテランである、と天下に公表した以上、あとへはひけぬ様子を私は喜んでいいる。

ただし、喜んでいない人もいいる。やっと生まれた男の子、と大事に育てた姑は「決して嬉しいことではない」と、正直にいう。明治生まれの女の声である。

## 出合いの場として

高橋 ますみ

八年前の秋、東海地方で「あごら」を読んでいる会員同士が出会いたいのと素朴な願いから、時間と場所を設定したのが、八あごら東海Vの生まれるきっかけでした。呼びかけ人の浅野美和子さんも私も、主婦の壁の中から必死に出口を求めている状況で、その日が、彼女とも、東京から駆けつけて下さった斎藤千代さんとも、初対面でした。

今以上に婦人問題の視点が社会通念化していない時期で、女性の経済的自立の必要性を云々すると、必ず逆上する主婦がいたりしま

した。自分の存在や生き方を全面否定されるように受け取ってしまいがちだったのだと思います。

八あごら東海Vでは、女の状況を個人の事情によるのではなく、共通項として、本音で語り合い整理しあえる仲間づくりをし、雑誌「あごら」の企画編集に、東京ではなく、地方の立場で参加し、仲間同士は経済的自立に向けて助け合いたいとの、私なりの夢がありました。でも、もし誰も集まってくれなくとも、一人よりは二人のほうが心強いから、この出合いを続けていこうと、会場のトイレの洗面台の前で浅野さんと誓い合いました。

この八年間にはいろいろのことがありました。そして、不思議なことに、私自身信じられないほど変わったし、それにつれて周囲の人間関係も状況も変わりました。それは初期に出会った仲間の一人一人を思い浮べてみても例外なくいえると思います。変な表現ですが、みんな強くなってきました。「もうあともどりできないよネ」とうなずきあえるほど、それぞれの家庭状況や地域で自分と周囲を変えていったといえます。私にとつては同じ問題意識、ものの見方、価値観を持っている仲間に出会えたことで、どんなに精神的に支えられたかしれません。

一番ものの言いくかかった夫や姑に、率直に本音でぶつかっていきうようになりました。こんなことなにもグループ参加しなくとも、当たり前のことなかもしれないませんが、私は私自身の意識をがんじがらめにしている、長い間、当たり前のことが言えなかったのです。今もかつての私のような主婦は多いと思います。

山下智恵子さんが、例会の席上で、「のた



れ死にの覚悟をして主体的に生きたい」と発言されたことがありましたが、そのことばは、私にとって大きな励みになりました。初期の例会では、夫のクツを誰がみがくかが重大テーマであったり、姑に嫁入道具が足りないといびられて、泣き出す人にみんながもらい泣きといった場面もありました。△あこら東海Vをいさぎよいリブグループだと伝えきいて、勢い込んでいらした活動家の方々が、めそめそやってくる私たちに拍子抜けして失望されたことも多々ありました。

婦人運動の次元の高い、建て前論は、ほかのグループにおまかせして、私たちは現実的にできる範囲内で、実行に移せることは、ボチボチやっていた。そういうグループがこれ世に一つくらいあっても、そう目くじらたてられることもあるまいにと思ってました。婦人問題の視点で、私たちの生活感覚の中にいてきてまだ日が浅いので、活動のサンブルが充分出そろってません。それに加えて動き出す前に、女同士が潔癖な評論家にばかりなりがちです。私は、個人の生き方にしろ、グループ活動にしろ、失敗のサンブルを作ることだって婦人運動の一つだと思っています。そんなひらき直った度胸を養ってくれたのが私にとっての△あこら東海Vでした。

## 悪妻にみがきをかけて

奥村和子

「ただいま、〇〇は出かけています。x時頃帰ると思いますが、一応のご用件は伺ってお

きます。まず、あなたのお名前は……」と、留守番電話のかわりの留守番おぼさんの私。

昔からの習慣で、家には必ず誰かがいるようにしなければならぬ。しかも、けっこう電話や人の出入りの多い家なのである。そして、その任務は嫁である私がするのが当然であるという。家のことではなければならぬ。あるといばいあるらしいけれど、今の私は留守番電話しかやらない。これも時々サボっている。叱られ、嫌味を言われても、四苦八苦で集会や必要な用事には出かける。

いつでも勤めに出れると思っていたけれど、親と同居を始めたから、「なにも外で働くことだけが、社会参加ではないはずだ」などと、夫も言いだした。夫が変わったのか!!と思っただけで、そうではなく、私が変わったのだということに最近気づいた。いわゆる嫁の夫が見えてきたのだ。

この春、夫は転職する。十二年間勤めた会社をやめ、学生時代からの夢を実現しようと努力する。おいそれとやれない状況もいっばいあるが、私は、できるだけやりやすいようにと手助けしているつもりだ。男性の友の教人も、趣味のためとか、友人のためとかという理由で、転職をした。けれど、彼らに連れそっている女性のほうは、いつの時も男のためにガマンしたり、あなたのためにと行っているだけ。そして専業主婦のまま。現実のパターンはちっとも変わらない。

私はベッドの中から「お帰らないさい」と言い靴が磨いてなかったりで、ますます悪妻にはみがきがかかっている。これからは張り切つてみがきをかけよう。それがどこにつながるかは、これからの二人にかかっている。

## 第三回全国婦人教育交流集会(高齢化社会を迎えて)に出席して

関和子

10月に作文を添えて応募したことを忘れていたら、1月、採用の通知が来、2月中旬2泊3日の研修の機会に恵まれた。北海道から沖縄までの参加者100名中、男子3名、△あこらVからは札幌の加我博子さんと私の2人だった。

1日目は「来たるべき高齢化社会」と題した公開シンポジウム、2日目は①健康・福祉②家庭・家族③経済・就労④社会参加⑤学習の5分科会で討論、3日目は各分科会の報告と講師の講評だった。私の参加した社会参加の分科会では、

まず「社会参加とは何か」から話し合いが始まり、自分が地域や社会の一員であるという意識をもち、社会における役割を果たすために何をするか、まず自分のしている運動をそれぞれ披露した。

福祉・婦人問題にあまり関心のなかった市長が辞任したあと、次期市長を婦人会活動に取り込み老人ホーム役立に成功した話。毎月「家庭の日」を設け、全村の人が家族と一緒に過ごすという話、独り暮らしの老人宅の戸外に緊急ランプを公費で取りつけた話、一円玉を持ち寄って「老後を幸せにする会」を運営している話など、いろいろな報告があったが、話を聞いて都市型と農村型のちがいを感じた。それはまた行政と運動体が相互依存した運動と、独立採算による独自の運動の差とも受けとれた。また、各自自治体に組まれているかなりの額の社会教育予算を助成金としてもらい受け、自主的な

活動をしている婦人会の報告もあった。

次に「福祉教育をどうすすめるか」に議題が移り、人づくり・組織づくりには年齢別の配慮が必要であること、方法としては、視聴覚教育に訴える、新聞を利用して仲間づくりするなどの案が出た。病院のボランティア奉仕手帳が全国組織でできたのもっと参加者がふえるのでは……という質問には、労力銀行など労力預託の方法も試みられているが、平等の建前がくずれぬ限り若いとき奉仕活動をしたくない人は福祉が受けられないのでは困るという意見が出た。

続いて老人の生きがい話が移った。体と心が健康で、若いときから問題意識をもつこと——が結論になったが、生きがいの中味は多様化していることが語られた。

以上、私たちの分科会で語られたことは他分科会にも関連していることが最終日の報告でわかった。老人ホームでリヤ王の劇を演じさせ、治療に効果をあげている例。徘徊を「散歩」と呼び、深夜の徘徊には「散歩」のついでにできる仕事を与えるという話。漏便は他人に対する怨念の表れであるなど、参考になる話が多かった。若いうちから心構えを持ち、仕事を続けることが最も望ましいことのように思われたが、ある助言者の「身障者が高齢者になったとき現状では対応できない」ということが胸に残った。これが今後の私の課題になるだろう。

# 反戦へ——草の根の動きひろがる

## ——党派をこえて婦人団体が統一行動——

●3月8日東京5地区で街頭署名

国際婦人デーの3月8日、午前11時30分—午後1時30分の2時間、△第2回国連軍縮特別総会へ向けて婦人の行動をひろげる会△通称ひろげる会△加盟38団体の在京メンバー24団体1390名が5つの駅頭で反戦アピールと署名活動を行ない、5万7千枚のチラシをまき、9712名の署名とカンパ22万4610円を集めました。

△あごらVも加盟団体の一つとして、新宿・渋谷・池袋・銀座・錦糸町の各地域に113名ずつ計10名が参加、約250名分の署名とカンパ約2万円を集めました。ちょうど月曜の昼で、活動に参加できた人が少数でしたのは残念でしたが、いちばん恥ずかしがりの人が手づくりの△あごらVのゼッケンをつけて立つなど、思いがけない動きもありました。(今後、街頭署名などに参加希望の方は、事務局までハガキをください)

●4月10日一ツ橋教育会館で反戦集会

盛り上がる反戦の思いをさらに深めようと△ひろげる会Vでは、4月10日、反戦集会を開きます。映画『人間をかせせ』を上映、東大、坂本義和教授の講演『軍縮と市民』全国各地の女性からの反戦アピール、井上頼豊さんのチェロ独奏などが予定されています。800人収容の会場ですが、△あごらVからは

最低25人は参加したいもの。お誘い合わせ、ぜひお出かけください。入場料は無料です。

●戦争を許さない女たちの会は5月2日

午後1時30分から、東京・千代田区の総評会館でシンポジウムを開きます。テーマは、「いま日本で反核・平和とは何か」、講師は中島通子さんほか。反核・平和の理論をこの機会に身につけましょう。

●△あごらVの署名活動3月末で1165名

署名用紙とカンパは毎日事務局に届き、この1か月半で1225名の署名とカンパ12万4501円が集まりました(3月8日の街頭活動会に含まれていません)。日ごろあまり活動分でない(△)といわれる△あごらVですが、この活動に示された全国からの熱意に改めて打たれています。なお、最終締切は4月29日(木)事務局必着です。4月30日(金)に各団体が地婦連に持ち寄ることになっています。貴重なカンパをできるだけ有効に使う方法も、そのとき討議されます。

●国連緑会のアピールに渡米希望の方は連絡を

2月号でお知らせした6月7日のニューヨークでのアピールは、参加費用65万円と記しましたが、その後、民宿その他の方法もあることがわかりました。現在、2名から申し出が来ていますが、できるだけ安い費用で行く

方法を考えたいと思います。ただし費用はすべて自弁です。

立ち上がった

サイレント・マジョリティ

◆盛会ヒロシマ行動

20万人を目指したヒロシマ行動は、3月21日、19万人の参加で、大成功裡に終わりました。メイン会場の平和記念公園はじめ、語り部の広場、若者の広場、スピーチの広場など五つの広場で多彩な催しがあり、子連れの市民参加も多く、特に切々とした被爆者からの訴えは、心にしみとおりました。



△あごらVの会員も全国から何人か参加しましたが、広い会場ではなかなかめぐりあえず残念でした。広島の一会員と事務局からの参加者はやまと行動を共にできましたが、「広島でも拠点のようなものをつくりたい」という声を聞きました。読書会のようなものからでも始められるとうれしいと思いますが、在広の方、ご連絡ください。

5・23の55万人集会も、ふつうの市民の参加で盛り上げたいものです。

◆成功させよう5・23東京行動

ヒロシマの成功に力を得て、30万人を上回る規模で、さらにダイナミックな行動を展開させようと、各市民グループで意気込んでい

ます。メイン会場は代々木公園、明治公園。ヒロシマでは設けられなかった婦人のひろばをつくらうという動きもあります。

拠点通信から

札幌・武蔵野・東海・京都などの各拠点では、それぞれ独自のミニコミを発行しています。「あごらミニ」をのぐ(一)いい記事もたくさんあります。ニュースではなく、記事そのものを転載したいのですが、スペースの関係上、今回はニュースのみ要約します。

〔札幌〕「今、戦争を考える」連続講座を実施中。10月「防衛問題」中山和夫、11月「原発に平和利用はあり得るか」鈴木りのり、12月「従軍看護婦の記録から」沖藤典子、1月「靖国法案」山口雅弘、2月「教育反動化」斎藤陽子・若月美緒子。4月は20日に「憲法改正」について、石田弁護士に学びます。

〔武蔵野〕2月・3月の例会で「女と組織」について継続討論。△あごらVがどういう場であってほしいのか、そのためにはどんなことが必要か、など語り合いました。4月号の「ミニ」はその内容です。乞うご期待。

〔東海〕2月は「女と情報」合評会。吉武・斎藤論文を中心に。3月は「△あごら東海Vの運営と組織について」。組織論や、雑誌「あごら」とのかかわりなどを。

〔京都〕2月は「家族」をテーマに、木野村啓子さんと稲垣良代さんがレポート。3月は「柳下村塾から帰って」石川美智子さんの報告。4月は「女の中年は危機の時か、それとも熟年か」17、18日、合宿で大討論します。

〔九州〕『87歳の青春』上映成功に力を得てますます張り切っています。差別撤廃・反戦等

へ向けて婦人団体の共闘体制がすすみ、八あごら九州Vは幹事団体になり、奮闘中。なお5月から区制変更により、連絡先の小島さんの区名は西区から中央区に変更します。

### 第34回婦人週間テーマは

「あらゆる分野への男女の共同参加」

——明日を築く役割と責任——

国連婦人の10年後半期2年目を迎え、固定的な性別役割分担の打破をメインに、各地で4月10日・13日、キャンペーンが展開されます。

全国集会「日本婦人問題会議」は、5月28日サンケイ会館で「あらゆる分野への男女の共同参加」に個性と能力を生かすために「午前中は活動事例報告(①婦人の自立と社会参加を旨として②静岡婦人問題懇話会③農業経営の婦人の主体的参加をすすめる④山形⑤看護婦の夫として、家庭・仕事・男女の自立とは⑥国立医療センター勤務者)午後は主題に基づき全体討論。講師湯沢雅彦・藤原房子・司会高原須美子さん。

東京集会は4月27日、神田コブビルで、記念講演「男女の共同参加を考える」「有馬真喜子、帰朝報告「男女平等と世界の動き」久保田真苗さん。両方とも参加は自由です。

### 『あいら』満10年記念

全国大会は7月31日—8月1日

宿泊希望の方は早くご連絡を

東京・新宿の厚生年金会館に宿舎と会場を仮り予約しました。たのしい前夜祭、自分の生と八あごらVの未来を真剣に討論する翌日

の討論集会、と、ヤングを中心にアイディアを練っています。4月の運営会議で大わくが決定すると思いますが、会場や宿舎を本予約しなければなりませんので、参加ご希望の方は、至急ご連絡ください。

(1人1泊3千5百円程度)

### 関西女性グループ

ジョイント・ディスカッションで

八あごら京都Vが発表

3月22日、大阪で日本女性学研究会主催の関西女性グループの交流会が開かれ、八あごらあむV八あごらいれんV八あごら日本女性学研究会Vなどとともに八あごら京都Vの塚崎美和子さんがパネリストとして「女性運動のこれから」について語り合いました。

塚崎さんは、「これから」の方向として、障害者・老人・子どもとの連帯を主張、「私たちの自立の声は、資本主義社会の発展とどうまく組み合わさって内外から促進されるでしょう。私たちはその時、自立できない生命がこの世にあり、誰かがその人を受けとめなければならぬし、そこをネグレクトしてわたちの自立が叫ばれるとしたら、不幸が別の形で生まれると思えませんか」と、「今後は草の根的、社会改良的、アカデミズムの三極に分解するだろう」という女性学研究会の未来分析に対し、「共生」志向の重要性を訴えました。

関西の女性グループが交流会を持ったことには大きな意味があるけれども、提起した「共生」の意味を、もう少し突っこんで語り合いたかった、というのが塚崎さんの感想でした。

障害者差別を訴える

### 『越境』第2号誕生!!

八あごら京都Vの塚崎夫妻を中心に、精神障害者や被差別者との境界を越えようと呼びかけているミニコミ『越境』は、いよいよ充実。●新島淳良／ひとりの「怪物」のこと●引揚げ体験の位相／塚崎直樹●名前と人権／金明観●孤立する現代人とわたちの「個」／塚崎美和子／性の解放／阿部ひろ江●子どもたちの状況／木野村啓子●赤堀政夫さんからの手紙、などズシリと重い内容です。今度の号の編集と印刷はBOCがお手伝いしました。が、校正者が「涙なしには読めなかった」と感動したほど。62ページとは思えない深い内容です。障害者にかかわりのある方だけでなく、差別に関心をもつすべての方、ぜひ読んでください。定価450円、送料200円。申し込みは、〒100東京都新宿区新宿1の9の6 BOCへ。(振替、東京3139331)

八あごら京都Vの連絡先が変わります。塚崎さん転居のため4月25日から下記に変更します。  
〒692京都市左京区一乗寺築田町56の1  
「we」読者2800人に  
3月15日、わたちの熱い期待にこたえてうぶ声をあげた新しい家庭科の雑誌「we」は、3000人にあと一息になりました。八あごらVの会員の方々も多数読者になって、半田たつ子さんも大喜びです。

### 3月分会費・基金受入れ状況

3月1日～3月31日分の会費納入は43名、27万7000円、基金は6名、2万2000円

円でした。今年度分票計は、396名、229万8360円、基金は64名、25万8000円です。なお、先号の累計532名は前年度分納入者も含み、今年度分は、353名です。

81年度決算は次号でお知らせします

81年度の八あごらVの決算は残念ながら赤字となりました。その処理は4月11日の運営会議で討論されますので、処理方法を含めて来月号でお知らせします。

### 「自己確立の心理学」勉強会

どうすれば自分を確立できるのか、望ましい方向に自己形成できるのか、心理学者のしようござんをお迎えして勉強会を開きます。

◆4月15日(木) 6時30分—9時

◆場所・あごら読書室(地下鉄・丸の内線「新宿御苑前」四谷寄り下車、30秒新宿通り左手に看板が見えます)

◆会員は参加費無料

### 【編集後記】

八あごら東海Vができて八年、東海なりの組織論が活発です。建前としての組織論があつて「私」が参加するのか、「私」にとって八あごらVは何なのか……。

そこで、悪評高い「夫についてホンネを語らないのか、ホンネで見つめてみました。それも変わつた部分があるとしたら、それこそが八あごらVとのかかわりではないかと思うのですが……。

皆様の率直な批判をお待ちします。(乙)



# <女のつどい・女の講座>

日 時	テ	マ	会 場
4月4日(日)13:00~16:00	「女は戦争への道を許さない」世田谷集会		せたがや婦人会館 調布市婦人数室 日本教育会館(神田一ツ橋)
9日(金)18:30~	あごろ京王・例会		
10日(土)13:00~16:00	婦人の行動を広げる会 映画・にんげんをかえせ、講演・軍縮と市民/坂本義和 各界からの反戦アピール		
11日(日)14:00~17:00	あごろ九州・例会 「女と情報」合評会/一夫一婦制と婚外交渉・レポーター 小野敦子		福岡市立婦人会館
13:30~17:00	あごろ浦和・例会 「婚姻制度」を考える		浦和コミュニティセンター
13日(火)18:30~21:00	あごろ札幌・例会 「離婚から結婚をみる」		喫茶のあ(南4142) 511-1377
18:00~21:00	戦争への道を許さない女たちの連絡会・定例会		連絡先 03-816-2057
18:00~21:00	「産業ロボットは何をもたらすか」星野芳郎 日市連市民講座		家の光会館(飯田橋下車5分)
14日(水)19:30~	新島私塾4月例会 「男と女」のまとめ 会費500円		新島私塾 03-323-4348
10:00~12:00	婦選会館講座 経済教室(第一期)講師 花原二郎		婦選会館 03-370-0238~9
15日(木)10:00~12:00	婦選会館講座 外交教室 講師 下斗米伸夫		婦選会館 03-370-0238~9
18:30~21:00	あごろ学習会「自己確立の心理学」講師・しま ようこ		あごろ読書室 03-354-9014
16日(金)18:30~21:00	あごろ26号編集会議		あごろ読書室 03-354-9014
17日(土)8:30~9:45	エイボン女性ランニング		熊本城二の丸公園お祭り広場 婦人センター 075-701-7161
17:00~18日(日)まで	あごろ京都・合宿「女たちの中年は危機の時か、それとも熟年か」 レポーター 平田ひとえ、作原千枝、塚崎美和子		
18:00~21:00	結婚の意味を問う継続討論 連絡先 藤村 03-354-2543		渋谷勤労福祉会館 鈴木宅
18日(日)11:30~15:00	あごろ大阪・例会「女の仕事・男の仕事」		
14:00~	あんふあんで・5月号編集準備会議		
19日(月)10:00~12:00	婦選会館講座 日本の中世史 講師・安田元久(4/19~ 隔週月曜日)		婦選会館 03-370-0238
20日(火)	あごろ札幌・「今、戦争を考える」連続講座・「憲法改悪への動き」		喫茶ノア 渋谷勤労福祉会館
21日(水)19:30~	アジアの女たちの会・女大学		婦選会館 03-370-0238~9
10:00~12:00	経済ゼミナール 講師 花原二郎(4/21~10/27隔週水曜日)		婦選会館 03-370-0238~9
22日(木)13:30~15:30	「縫田摩子さんを囲む会」——国連婦人の地位委員会に出席して——		婦選会館集會室 03-370-0238~9
23日(金)16:30~22:00	あごろ北東京・例会 「エコロジー問題について」		婦人協同法律事務所 03-985-3308
24日(土)18:30~21:00	あごろ九州・例会 「女と情報」合評会つづき		福岡市立婦人会館
14:00~16:00	あんふあんで・「女のくらしと平和」講師・斎藤千代		蒲田生活センター
25日(日)14:00~	あんふあんで・5月号編集作業会議		旭町近隣センター
12:00~	あごろ柏・例会 『各国女性事情』『母性をひらく』を読んで		
27日(火)13:30~17:00	婦人週間東京集会・「男女の共同参加を考える」有馬真喜子・久保田真苗		神田コービル
27日(火)18:00~21:00	「レーガン政権は日本に何を求めているか」砂田一郎 日市連市民講座		家の光会館
29日(木)14:00~18:00	「近代日本婦人教育史」を語る会——千野陽一氏をかこんで 会費3000円		連絡 重田純子 03-715-1111(内615)
5月2日(月)13:30~17:00	戦争への道を許さない女たちの会セミナー「いま日本で反核・平和とは何か」講師・中島通子ほか		総評会館(地下鉄「新お茶の水」)または「淡路町」下車 あごろ読書室
6日(木)18:30~21:00	あごろ26号編集会議		婦選会館 03-370-0238~9
7日(金)13:30~15:30	婦選会館講座 暮らしに必要な法律 講師・山田律子ほか		福岡市立婦人会館
9日(日)	あごろ九州・例会		婦選会館 03-370-0238~9
10日(月)13:30~15:30	婦選会館講座 日本の政治と選挙 講師・柚正夫(毎月第2月曜)		婦選会館 03-370-0238~9
11日(火)13:30~15:30	婦選会館講座 心理学教室 講師・秋山達子(5/11~7/20 隔週火曜)		婦選会館 03-370-0238~9
18:30~20:00			
16日(日)13:30~17:00	あごろ浦和・例会		浦和コミュニティセンター
13:30~17:00	第4回名古屋市婦人のつどい		名古屋市中区役所講堂
21日(金)18:30~21:00	あごろ26号編集会議		あごろ読書室 03-354-9014
23日(月)13:00~16:00	反核・反戦=東京行動		代々木公園ほか

## 各地のあごろ連絡先

旭川市神楽岡1条5丁目3 田代慶子 0166655237 0166655237	旭川市札幌1条6丁目グランドハイム琴似 0116644227 0116644227	仙台市茂庭字生出前4の65 三船照子 0222245599 0222245599	あごろ浦和 浦和市南浦和2-19-8 山中マツ江 0488877336 0488877336	あごろ柏 柏市豊四季台3-1-1 古賀節子 0477144566 0477144566	あごろ北東京 豊島区東池袋1-45-11 メゾン金子202 0339853308 0339853308	あごろ武蔵野 小平市小川町1-7-6 丹羽雅代 0423443673 0423443673	あごろ京王 調布市仙川町8-12-32 福井浅子 0330887711 0330887711	あごろ神奈川 川崎市多摩区東生田2-2-12 森山方沼田千恵子 0449933311 0449933311	あごろ東海 愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘1-12-9 伊藤汎美 0561339223 0561339223	あごろ京都 京都市左京区一乗寺築田町56の1 塚崎美和子 0757914462 0757914462	あごろ大阪 茨木市西駅前町3-3-3 遠藤由美 0726231033 0726231033	あごろ九州 福岡市西区笹丘2-1-7 小島豊子 0922211774 0922211774	福岡市西区笹丘2-1-7 小島豊子 0922211774 0922211774
--	---	---	--	---	---	---	--	---	--	--	---	---	--